

早稲田大学博士論文(審査報告書)		
	学位記	文科省報告
2004	3892	甲 Z1966

博士論文審査要旨

2004年11月25日

論文提出者： 永田 英理（教育学研究科博士後期課程3年）

論文題目： 蕉風俳論の付合文芸史的考察——蕉風連句研究への試み——

主査：	早稲田大学名誉教授 文学博士（早大）	堀切 実
副査：	早稲田大学教授 博士（文学）	中嶋 隆
副査：	早稲田大学教授 文学博士（早大）	雲英 末雄
副査：	聖心女子大学名誉教授	奥田 勲
副査：	コロンビア大学教授 文学博士	Haruo Shirane

本論文の構成

永田英理氏は、聖心女子大学において、連歌研究を専門とする奥田勲教授の薫陶を受けたあと、2000年4月より、早稲田大学大学院教育学研究科国語教育専攻に入学、日本詩歌史への広い展望の上に立って、近世俳諧の研究に励み、はやくから全国レベルの学会で研究発表をするなど、その学問的才能を開花させてきた。2002年3月には、修士論文の核を成した二本の論文によって小野梓記念学術賞を受賞している。その後、後期課程に進んでからも、その研究意欲は旺盛で、2002年4月から2004年3月までの二年間にじつに10本の論文を執筆、発表しており、しかもその大半は『連歌俳諧研究』（俳文学会）、『文学』（岩波書店）、『文学・語学』（全国大学国語国文学会）、『国語と国文学』（東京大学国語国文学会）など、超一流の学会誌であった。早稲田大学の、いや全国的にみても、人文学系の若手研究者としては、かつて例をみないほどの驚異的な業績である。なお、2004年11月に開催された早稲田大学国文学会において、2003年度に発表された五点の論文によって、窪田空穂賞を授与されている。

さて、本研究は、芭蕉を中心とした蕉風俳論を、中世歌論・連歌論から近世中・後期の俳論に至るまでの巨視的な展望において、史的に位置付けながら、芭蕉やその門人の俳諧観——とくに付合文芸としての連句観を詳細に分析したものである。具体的には従来から知られた蕉門の基本的俳論書を新しい視点から徹底的に解明し、さらにこれまで未紹介の写本で伝わる伝書類を博搜調査して、その内容を紹介、分析して、総合的に蕉風俳論の特質にアプローチしている。その研究姿勢は、広い文学史的視野の上に立ちながらも、テキストの読みなどについてはきわめて緻密で実証的であり、簡単には自己に妥協しない一徹さに貫かれている。他方、またことばに対する豊かな感性の働きは、芭蕉の作品を解釈、鑑賞する場合など、きわめて有効に発揮されており、そうした感性と思考の論理性とが、

よくバランスを得ている点が、なによりも特筆されるのである。申請者の研究が、今後、国際的にも評価されてゆくことが、十分予測される。

論文全体の構成は以下のようになっている。

はじめに

第Ⅰ部 蕉風連句付合論——その分析と方法

第一章 蕉門の式目・作法観

第一節 蕉門の式目観——許六と支考——

第二節 『去来抄』『故実』篇にみる式目・作法観——連歌式目と俳諧式目——

第二章 「恋離れの句」考

第三章 連句一巻総評論

第Ⅱ部 支考の「七名八体」説の付合文芸史的考察

第一章 座の文芸理論——支考の七名八体説の浸透と変質

第二章 蕉風連句における「有心付」の検証——「有心付」は「句付」にあらざ—

第三章 蕉風連句における「起情」の手法をめぐって

第四章 蕉風俳論における付合用語としての「会釈」の変遷

第五章 「色立」という手法

第一節 「色立」の付合文芸史的考察

第二節 色彩表現と俳諧——「色立」の手法の転用をめぐって——

第Ⅲ部 蕉風発句論への視座——「題・本意」と「実感・実情」と

第一章 蕉風俳論における「本意」の一考察

第二章 「題」の俳論史——詞の題、心の題——

第三章 詩人芭蕉、感性の覚醒——発句表現における「触覚」のはたらき——

むすびに

以下、順を追って審査概要を記す。

はじめに

この論文が総体として、蕉風俳論を、連句の式目論や付合手法を中心に、蕉門系伝書の博搜の上に、巨視的な立場から、その特色、独自性を明らかにすることを意図するものとする。

第I部 蕉風連句付合論——その分析と方法——

第一章 蕉門の式目・作法観

第一節 蕉門の式目観——許六と支考——

連句の歌仙一卷の展開に変化をもたらし、また秩序を保たせるための基準となるルールが式目である。その式目に対する芭蕉の自在で柔軟な姿勢は、『去来抄』『三冊子』などに伝えられる記事から十分に推量され、これまでの研究で明らかにされてきている。

そこで本論では、芭蕉のそうした式目観を本格的に継承したとみられる門人中の論客、許六と支考の考え方を解明し、蕉門における俳論の継承、発展のさまを探った。その結果、許六・支考ともに、「差合」すなわち類似語の接近を避けるルールなどについても、それは「時宜」に応じてなされるべきだという芭蕉の自在な態度を、忠実に継承しようとしていることが確認された。

さらに許六は、『宇陀法師』において、当時の俳壇の式目軽視の風潮を正すべく、『連歌新式』のような式目伝授の型の存続の必要を説き、自ら積極的に『俳諧新々式』を執筆していることが注目される。

また支考も、式目の意義についてくり返し説き、芭蕉の俳論を整理、統合して『二十五条』なる論書をまとめている。芭蕉の伝書のなかでも、第一級の内容と後代への影響力をもったものであった。

この節の論考では、従来、師芭蕉の説とは大きな距離があるとみられてきた支考の俳論——とくに『二十五条』の説が、基本的に師説に忠実であることを具体的に実証した点が評価される。また連歌式目を継承、発展させてきた俳諧の式目の性格を、改めて諸種の連歌論書と照合しながら検証したことも有益であった。

第二節 『去来抄』「故実」篇にみる式目・作法観——連歌式目と俳諧式目——

蕉門における俳諧の法式を一括して示した『去来抄』「故実」篇についての、はじめての本格的分析である。これを連歌式目や貞門談林時代の俳諧式目と比較・検討することで、芭蕉の式目観の独自性を明らかにした。

まず『去来抄』「故実」にみえる諸説には、たとえば無季の発句を容認する説が『連歌至宝抄』にみられたり、恋の句を一句で捨ててもよいとする説が『宗祇袖下』にすでに出るなど、これまで芭蕉独自の説とみられがちであったものも、必ずしもそうではないことが指摘されている。けれども、その反面、「桜」の句を「正花」と認めない見解や「切字に用ふる時は、四十八字皆切字なり」といった切字本質論などは、明らかに蕉門の俳論の独自性を主張しているものと位置づけられるのであった。

この論では、芭蕉の作法・式目観の独自性を追究する姿勢のなかで、なお、その論述に不徹底な面を残してはいるが、従来、秘伝書的な性格が強調されるあまり、その内容の検証がおろそかにされてきた「故実」篇を縦横に解明して、その俳論史的位置を明確にさせた点が評価に値しよう。

第二章 「恋離れの句」考

連句の付け運びでは、三句のわたり（打越・前句・当句のあいだでの変化）でどのように転じていけるかが生命線になる。この論では、そうした転じのしかたの具体的方法として、「恋離れの句」——前句に付けると恋の句になるが、その句一句だけでは恋の意をもたぬ句——の扱い方を検証している。すなわち、「恋離れ」になるために付句一句がどのような性格の句になっているかを、すべての芭蕉の連句作品を対象として調査、分析して、これを統計的に提示し、蕉風以外の連歌・初期俳諧・元禄俳諧などについての調査結果と対比させることで、その特色を明らかにしたものである。

分析の結果、許六の『宇陀法師』などで恋離れのことばとしてあげられている旅の句ではなく、蕉風ではむしろ地名と食物を詠み込んだ句が恋離れに多く用いられていることが判明した。地名が内包する歴史的意義、あるいは食物といういかにも俳諧的題材というのが、恋離れに有効な働きをなしているのである。

本論考で試みられた素材（ことば）に着目して付句一句を類別する方法は、文体から文体への付合を重んずる傾向をもつ蕉風連句においては、必ずしも適切でない面があるが、連歌をはじめ広く当時の連句作品をも対象として分析を試みた点は、画期的であり、統計処理法に多少のアンバランスはあるものの、こうした具体的な研究法は、これまでなかったものだけに、高く評価できよう。

第三章 連句一巻総評論

江戸時代以来、連句の観賞は、もっぱら“三句のわたり”——つまり、打越・前句・当句の三句ずつの変化のおもしろさを中心になされてきた。しかし、今日、連句を文芸として批評しようとする場合、どうしても歌仙一巻全体の展開を総体としてとらえてゆく必要がある。

本論考では、こうした問題意識に立ち、連歌以来の一巻見渡し論——序破急の論や懐紙表裏の対応関係に関する説を再確認しつつ、一巻総評論への見取図を提示している。部分的には綿密な叙述になっていない点もあるが、連歌の百韻形式と俳諧の歌仙形式との対応のズレなどをどのように克服すべきかなど、今後の検討課題が明らかにされている。

一巻総評論の試みには、こうした式目作法的な解明だけではなく、作風的な推移や内容上の変化など、作品そのものに即した本格的な考察が、今後要求されるであろう。

第Ⅱ部 支考の「七名八体」説の付合文芸史的考察

第一章 座の文芸理論——支考の七名八体説の浸透と変質——

第Ⅱ部「七名八体」説に関するいわば総論である。付合文芸としての連句において重要な一巻の流れの変化をどのようにしてつけるか——その具体的手法を理論化して示したものが、付句の案じ方「七名」（有心・向付・起情・会釈・拍子・色立・遁句）と付け方「八体」（其人・其場・時分・時節・時宜・天相・観相・面影）であるが、この理論は江戸時

代を通じて広く流布・浸透していった。けれども、俳諧史がしだいに連句中心から発句中心の時代を迎えるに従い、個々の手法の誤用が生じ、またこれを発句の理論に転用するなど、かなりの変質もみられるようになる。本論考では、そうした点にも十分注意しながら、「七名八体」説の果たした総合的な役割を明らかにしている。はじめての本格的な「七名八体」論として意義のある論考である。

第二章 蕉風連句における「有心付」の検証——「有心付」は「句付」にあらず——

支考の「七名八体」説の冒頭にあげられる「有心付」は、従来、蕉風付合の中核をなす「句付」とほぼ同義のものとされてきた。論者は、「有心付」の「有心」が、定家が『毎月抄』に説く「和歌の有心」——すなわち作者の心の持ち様を説く「有心体」とかかわる理念であるとみて、それが「余情」や「妖艶な美」といった内容的概念ではないことを指摘する。したがって「有心付」の「有心」が余情・余韻によって付けるという、いわゆる「句付」の案じ方とは、必ずしも同一でないとするのである。美濃派を中心とした蕉風俳論書に説かれてきた「有心付」の用例も、「余情付」というよりも、むしろ「心付」すなわち「句意付」の要素が強いことが実証されたのであった。

これまでの研究史において、「句付」「余情付」とほぼ同義に扱われてきた「有心付」の本質をみごとに解明した論考である。ただし、今後、「有心」の付合例について、連歌以来の作品にも即して、より史的に検証することができれば、論証はさらに厚みを増すであろう。

第三章 蕉風連句における「起情」の手法をめぐって

「起情」とは、叙景、叙事句が数句続いた場合、これを人情の句に転じさせる付け方をいう。第二章に扱った「有心付」の一手法である。連句一巻のなかで、「景」の句と「情」の句のバランスを配慮する必要のあることは、はやく兼載の連歌論書『連歌延徳抄』に説かれ、「起情」に似た手法も、古くから行われていたとみられるが、本論考では、そうした史的状況をふまえながら、蕉風連句において、「起情」が付合変化の上で、きわめて有効な手法として用いられてきたことを検証している。

一方、俳論史の上で、「起情」が、前句の人情から、別種の情を起こす手法（これに類似した手法に「情を押す」というものがある）としても、転用されてきている実態にもふれ、式目・伝書といえども、単なる旧説の継承のみではないことをも明らかにしている。

この論考では、まずなによりも、連歌論、初期俳論、そして蕉風、蕉風以後の俳論へと資料を丁寧に調査し、広い視野に立って分析していることが、なによりも評価できる。「景気」「人情」それぞれの付句の解明を、さらに多くの作品に即して試みてゆけば、蕉風連句論として有効になるだろう。

第四章 蕉風俳論における付合用語としての「会釈」の変遷

「会釈」とは三句にわたる転じの難しいとき、軽くあしらうように付ける手法をいう。連歌論にもみられ、俳論でも、貞門・談林など初期俳諧で、縁語などのことばの連想によ

って軽く付ける法として有効であったことが、先学の乾裕幸の研究（「あしらひ」考）によって、すでに解明されている。

本論考では、この「会釈」の説を、芭蕉以降の俳論書・作法書から博捜し、それが支考が『俳諧十論』に説いた「会釈」の説——前句の人物の服装や、辺りの道具類によって付ける手法——をほぼそのまま踏襲していることをつきとめた。蕉風連句の実作において、こうした「会釈」の手法がきわめて有効であったことが証明されたともいえる。

着眼点など、乾裕幸の論考に全面的に依拠した論考であるが、蕉風俳論史においては、支考の説がいかに重用されてきたかを明らかにしている。今後さらに、この「会釈」とともに支考の付合論に提示されている「遁句」との相違点などについても考察を加えてほしい。

第五章 「色立」という手法

第一節 「色立」の付合文芸史的考察

付合文芸において、前句のなかに含まれる“色彩”を手がかりに付句を趣向してゆく手法は、連歌以来用いられてきた。しかし、この色彩による付け方を明確に理論化して、「七名八体」説にくみ込んだのは支考であったとみられる。支考によれば、「色立」とは「景色の取合せ」（『俳諧十論』）をいうのであり、「景（景色）」に「景」を付ける手法であった。多くの解説書にいうような、前句の題材を付句で色彩によって応ずるものではなかったことが指摘されている。

「色立」はまた、前句に対して類似色で応ずるものではなく、異なる色彩による対照の調和を生命としたものであった。ここに支考の「色立」論の特色があるとする。

こうした「色立」の手法は、第四章に扱った「起情」と同様、時代を経るに従って、さまざまに転用、もしくは誤用されてゆくが、やはり歌仙一卷変化の法として、実作上、有効なものであった。

本論考では、なお「色立」による具体的な付合表現の効果などについての分析が、必ずしも十分なものになっていない憾みがあるが、こうした付合の手法について、はじめて本格的にとりくんだことの意義は大きい。

第二節 色彩表現と俳諧——「色立」の手法の転用をめぐって——

前節をふまえ、「色立」という付合手法が、連句中心から発句中心へという俳諧史の推移のなかで、しだいに発句論へも転用されていった現象について論じている（なお、その他、「移り」「響き」「句ひ」といった付合用語に至るまで、発句論への転用がみられるという）。

最初の発句論への転用がみられるのは『俳諧提要録』（安永二年序、鳥酔述）、また蓼太の『附合小鏡』（同四年刊）である。「風姿」「景気」といった視覚的イメージを尊重する具象的作風をめざす場合、そこに色彩感覚の反映が求められるのは当然である。とくに元禄文化以降、江戸時代は色彩文化の華やかに発展した時代であった。

文化史背景に留意するとき、俳諧においても、色彩表現のあり方についての考察は不可

欠である。その意味で、はじめて「色立」を問題にしたこの論考は、先駆的役割を果たすものであろう。

第三部 蕉風発句論への視座

第一章 蕉風俳論における「本意」の一考察

「本意」とは、日本文学における詩歌の伝統のなかで公認された、対象のもつ最も本質的なものをさしている。蕉風俳論にいう「本情」もほぼ類似の概念である。

そこで、蕉門の去来・許六・支考の説く「本意」論を分析すると、三者とも基本的には「本意」尊重の立場に立つが、徹底して終始「本意」もしくは「本情」を重視する去来・支考と「俳諧の花」としての「新しみ」に力点を置いて説く許六とのあいだに微妙な差異が見届けられるのであった。「本意」と「新しみ」は蕉風俳論においては、二律背反の関係にあると同時に両者融合されるべきものでもあった。その点に単に伝統的なものを継承することとは異なる、俳諧の本質があったとする。

そうした蕉風における「本意」のとらえ方について、注目すべき説として、論者は、『去来抄』にいう「本意をうち返す」発想法をとりあげる。この「本意」の逆説的なとらえ方にこそ俳諧にふさわしい手法があると結論づける。

「本意」論、あるいは「本意をうち返す」法についての、和歌・連歌論史を広く見渡した上での検証にはまだ不十分なところもあるが、蕉風俳諧のめざすところを鮮やかに切り出した論考はみごとである。

第二章 「題」の俳論史——詞の題、心の題——

「題」とは歌会や句会において出される題——すなわち「題詠」の際の主題をいう。日本詩歌史はおしなべて、この「題詠」を中心に発展してきた。ただし、俳諧においては、季節にまつわる題——すなわち「季題」の論が中心になってきた。

初期俳諧——貞門・談林における「題」は、おおむね連歌の季題論をそのまま継承するものであったが、蕉風では、和歌、連歌に対する俳諧独自の「題」についての自覚がはじまっている。伝統的な「豎題」に対する「横題」の提起である。さらに江戸中期に至ると、俳論のなかで、形式的な「詞の題」に対する内容的な「心の題」が重視されてくる。これは以後さらに「題詠」に対して直接対象に向っての「実景詠」の必要性を導き出してゆいたのであった。こうした「題詠」と「実景詠」とのせめぎ合いは、近世和歌史においても指摘されているが、俳諧史においても大きな課題となつてゆき、近代ではさらに実作のあり方の焦点となるのであった。

本論考では、江戸中期の俳論書『俳諧古雅談』（己蝶編、宝暦七年刊）にみえる発句の「題」の論の分析を基礎に、こうした「題」への意識のあり方を、多数の俳論書、伝書類から探り、近世俳論史の内実に向っている。やや概観的な叙述にみえる点もあるが、俳諧史・俳論史における「題」の問題をはじめて扱った点、また豊富な資料をよくまとめて整

理している点など、秀逸な論文となり得ている。

第三章 詩人芭蕉、感性の覚醒——発句表現における触覚のはたらき——

詩人芭蕉の鋭い感性の働きについて、認知科学、認知心理学的方法を切り口として、具体的な分析を試みる。芭蕉の発句の表現法には、身体全域の諸感覚を統合する、いわゆる「体性感覚」の働きが、顕著にうかがえるが、その「体性感覚」的な働きにとって最も重要な感覚に「触覚」がある。そして芭蕉の表現には、イメージとしての「触覚」がつねに強力に働いている。

本論考では、「さゞれ蟹足はひのぼる清水哉」のような直接の皮膚感覚の句から、「藻にすだく白魚や取らば消ぬべき」のような視覚に触覚を働かせた句、「石の香や夏草赤く露暑し」のような視覚、嗅覚、温度感覚を複合的に働かせた句、「麦の穂を便りにつかむ別れかな」のようにイメージとしての触覚を働かせた句まで、幅広くとり上げて分析している。

近年、研究者のあいだの芭蕉の句の読みは、執拗な出典・典拠の調査などをふまえて、意味論的な解釈、知的、論理的な理解へと傾いている。けれども、芭蕉はまぎれもなく、ことばの感覚や感性の働きを尊重した詩人であった。本論文は近年における芭蕉理解のあり方の歪みを正し、その反措定をなすものとして、高く評価されるべきものとする。詩人としての芭蕉の俳諧を「俳諧性」の分析のみにおいて論ずることは、誤りなのである。

本論文の総体的評価

本論文は主に付合を中心とした蕉風俳論の種々相を分析することによって、蕉風俳諧(発句・連句)の作風を研究するための基礎的理論を築いたものである。論文の記述形式の上で、和暦と西暦の併用、漢字の正字と略字の用い方など、細かい点での多少の不統一も指摘できるが、内容的には、「七名八体」説における一つ一つの付合手法の史的検証は、それが江戸時代を通じて実際に大きな影響力をもった理論であっただけに、とくに有意義なものといえる。また日本詩歌史の根幹の問題である「題」の俳諧史的追究、さらに芭蕉の表現における詩的感性の働きについての分析も、発句研究に新しい方向性を提示したことになる。

今日、アメリカ・西欧・東アジア文化圏をはじめ、世界的にも「連句」というわが国独特の付合文芸は注目されている。比較詩学的な立場からの関心も高まっている。世界最短詩型の文芸としての「俳句」の国境を越えた普及については、今さら指摘するまでもない。そうした発句・連句を核とする俳文芸の特色を、単に日本文学史上においてとらえるのではなく、国際的視野から追究してゆくことは、今後、本論文の著者に課せられた重要な課題となるであろう。

以下、まとめの意味で、本論文の特色といえるものを列記してみる。

1. 蕉風俳論を、歌論・連歌論・俳論という流れのなかで明確に位置づけ、さらに芭蕉以後の俳論の展開についても、多くの文献を調査することによって、巨視的な観点から相対化している。
2. 従来、ほとんど関連づけられることのなかった中世連歌論と近世俳論に架橋することを試み、その連続性と非連続性とを明らかにするなど、日本詩歌論の再構築へ向けての挑戦がみられる。
3. 俳論の論理的解明のみでなく、可能なかぎり例句を具体的に一つ一つ検証しながら、その作風や表現の特徴についても考察している。
4. 芭蕉の俳諧——とくにその発句における表現の特色について、広く認知科学をはじめとした他分野の研究成果を積極的にとり入れながら、新鮮な考察を加えている。
5. 江戸期の文献——とくに従来ほとんど注目されることのなかった美濃派を中心とした俳諧の伝書類を博搜して、圧倒的な情報の豊富さに基づいて考察が行なわれている。
6. テキストの解読、分析が、きわめて論理的、的確になされている。
7. ひろく芭蕉の俳論の詩学としての国際性にも目をくばるなど、今後の比較詩学的発展が期待できる。

以上の諸点から総合的に判断すると、本論文が新製の博士論文として、その学位にふさわしい十分な水準に達しているばかりでなく、今日の俳文学研究を刺激するところが多大であり、今日の学会レベルを超える秀れた業績であると認めることができる。

もちろん、本論文の提出者に今後課せられる課題もまた多く残されているが、つねに謙虚でひたむきな提出者の研究者としての資質が、これに十分応えられるものであることも、本論文がおのずと語っているのである。

今日やや停滞感の漂う日本文学研究——とりわけ芭蕉を中心とする俳文学研究の現状を打破し、新しい研究の発展を期す上で、本論文の果たす役割は大きなものがあり、審査員全員一致で「博士（学術）」の学位に値するものと評価できるという結論に達したので、ここに報告する。

※主査付記：本論文については、すでに複数の出版社から刊行のすすめがあり、なるべく早急に公開上梓の方向で指導したいと考えている。